

[エッセイ] ドイツ留学体験記

その他のタイトル	[Essays] Unsere Erlebnisse in Deutschland
著者	三仲 順子, 藤川 侑子, 藤田 恵莉, 吉田 紘子
雑誌名	独逸文學
巻	54
ページ	215-222
発行年	2010-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018039

[エッセイ]

ドイツ留学体験記

1. 三仲 順子：ゲッティンゲンに来た私

私は2009年の秋からドイツのゲッティンゲン大学に交換留学生として派遣されました。私が留学を決意したきっかけは、昨年夏に1ヵ月間参加したこの大学での語学研修でした。その語学研修に参加したのは、独文に所属しているのだから一回はドイツを訪れてみたい、という軽い気持ちからでした。しかしその1ヵ月の体験は私の考えを大きく変え、どうしても長期に留学してみたいと思うようになったのです。それでも、留学が決まった時は喜びと同時に、ドイツでの授業に付いていけるだろうか、友人はできるだろうかなどの不安もありました。しかし、語学研修で1ヵ月過ごしていたおかげで、街にはすぐに慣れることができました。さらに、大学が始まる前に約1ヵ月の語学セミナーに参加したことで友人も徐々に増え、それからは毎日がとても楽しくなっていました。

元々聞き取りが得意でない私にとって、初めの頃はドイツ語を聞き取ることが大変でした。先生やクラスメートが何を言っているのかわからないこともよくありました。私のクラスにはスペイン語圏から来ている学生が多く、スペイン語なまりのドイツ語を聞き取るとは、私にとって本当に難しかったです。特に授業中はペアワークが多く、2人で会話をしながら進めていくので、相手の言っていることがわからない上に、上手く自分の意見を伝えることができず、とても悔しい思いをしました。ドイツに来て3ヵ月が過ぎても、自分の中で大きな進歩を特に感じる事ができず、不安になることもありましたが、しかしある時、それまで理解できなかった電車の車内アナウンスが、ふと理解することができたのです。自分の成長に不安ばかりだった私にとって、わずかながらも進歩が感じられたその瞬間はとても嬉しいものでした。

ドイツの大学の授業では、講義中であっても学生が手を挙げて質問をします。先生も全ての質問にその場で答え、初めて受けた時はまるで講

義ではなく、ゼミを受けているような印象でした。どの授業でも学生の取り組み態度が、日本の学生よりも積極的であるように感じました。そしてドイツの大学生生活で一番日本との違いを感じたことは、学生によるデモンストレーションでした。最近ドイツでは、教育制度の改革に対する学生デモが盛んに行われています。日本でデモを見たことがなかった私にはとても衝撃的でした。学内には大々的にポスターが貼られ、学生が座り込み運動をすることもあります。さらに大勢の学生が高々と旗を揚げ、街中をデモ行進するのを見たときは、驚くと同時に、過激で怖いとも感じました。デモの際に暴動がおこることはありませんでしたが、警察も出動していました。しかし、ドイツの学生にとってデモによって自分たちの意見を主張することが、非常に重要なことであると改めて感じる機会でもありました。

ドイツは学生の待遇が良く、学生証があればその州の電車を無料で乗ることができます。ゲッティンゲンはニーダーザクセン州ですが、学生証を使ってブレーメン州やハンブルク州にも行くことができます。だから私は休暇に入ると、よく小旅行に出掛けています。友人と旅行することもあれば、一人で出掛けることもあります。ドイツの旅先ではしばしば素敵な出会いが待っています。最近も、クリスマスに旅行に行った時のこと、電車の席で私の前に座っていた年配の男性が、私たちに声をかけてくれました。そして目的地に着くまでの約1時間、その男性は初対面の私たちに家族や友人の話をしてくれ、とても有意義な時間を過ごすことができました。私たちは連絡先を交換し、お互いにまた連絡をする約束をして別れました。日本では近くに座った人に声をかけることや、連絡先を交換することなんて私には考えられませんでした。しかしドイツでは、このような旅の出会いが沢山あります。これもまた、旅の楽しみの一つです。

ドイツに来て約4ヵ月、辛いことや苦しいこともあります。それ以上に毎日とても充実した生活を送っています。この留学という大きなチャンスを与えて頂いたことに、とても感謝しています。ここで体験したことが必ずプラスになり、自分自身を成長させるということを確認し、これからも日々努力していこうと思いを新たにしています。

2. 藤川 侑子：初めての海外、初めての留学、初めての交流

生まれてから20年間ずっと日本国内で生きてきた私には、人生20年目にして初めての海外、初めての留学は本当に刺激的です。

ドイツに来て、やはり日本とドイツの文化の違いをよく目にします。個人的に面白いなと思ったことは、ドイツ人が滅多に傘をささないということです。雨が降ろうが雪が降ろうが、よっぽどの土砂降りでない限りドイツ人は傘をさしません。なぜ傘をささないのか尋ねたところ、「傘をさすのは女々しい」という答えが返ってきました。日本人の感覚からは、なぜ傘をさすと女々しいのかはわかりませんが、雨が降っても多くの人は上着のフードを被る程度で、傘をさして歩いている人というのは本当に稀です。秋のドイツはよく雨が降っていたので、最初は雨に濡れて風邪でも引いたら困ると思い、毎回鞆に折り畳み傘を入れていたのですが、今では少し面倒になってしまったのと、郷に入っては郷に従えの精神で、最近ではあまり傘をさしていません。

学習面で面白いと感じたことは、アジア系の学生はわからない単語があったときにすぐに電子辞書を使いがちですが、ヨーロッパ系の学生はそれほど頻繁には辞書を使わず、できるだけ先生にその単語がどういう意味かを質問し、ドイツ語で説明を受けて覚えるというパターンが多いということです。実際、授業中に初めて使うような単語が出てきた場合、先生がドイツ語で説明をしてくれるのですが、簡単な単語のみを使って説明してくれるので、とても解りやすいうえに自分で辞書を使って意味を調べるよりもよく頭に残ります。以前はすぐに辞書を使ってしまうがちだった私も、最近ではわからない単語があった場合、すぐに辞書を引くのではなく、できるだけ友達などに一度尋ねて簡単なドイツ語で説明してもらい、どうしてもわからなかったときにだけ辞書を引くようにしています。

私がドイツに来て一番困ったことは、ドイツの鉄道関係です。ドイツの列車は日本の新幹線などに比べ、比較的値段も安く、奇麗で速いのですが、冬などの寒い季節は雪の影響で大幅にダイヤが狂います。たとえば、予定の時刻になっても列車がいつまでもホームに来なかったり、予定通りにホームに来たとしてもなかなか発車しなかったり、他の列車の

遅れとの兼ね合いで急にホームが変わったり、ということは日常茶飯事です。そして、一番驚きなのが、列車が何時間遅れようがほとんどの場合、謝罪も説明もないということです。ヨーロッパの鉄道は概ね時間にルーズらしいので、ドイツ人や他のヨーロッパ圏から来た人たちにとって、列車の遅れというものはそれほど珍しいことではないようですが、時間に正確な日本の電車で慣れていた私には、列車が何時間も遅れることよりも、何時間遅れてもそれを当たり前のこととして受け入れているドイツ人の大らかな国民性の方が驚きでした。雪の季節には、列車が遅れることを前提として、余裕を持って予定を組むようにすればいいだけの話なのでしょう。その他にも、先日 ICE で席を予約したところ、機械のミスなのか指定された席が存在せず、結局空いていた別の席に座ることになりました。その際にも、担当の人からの謝罪も説明もなく、「その空いている席に座ってください。」と一言言われたただけでした。

ドイツに来る前は、ドイツ人は「真面目で規律に厳しい」というイメージを持っていたのですが、実際はそこまで規律に厳しいということはなく、どちらかというと「何事にも適当である」というように感じました。また、私個人の勝手な思い込みですが、以前はドイツ人に対して「厳しくて怖い」というイメージを持っていたのですが、私が出会った多くの人とはとても親切で、よく笑う陽気な人が多いように思います。ドイツで他の町に行ったとき、駅や列車内で困っていると、必ず近くにいるおじいさんやおばあさんが世話を焼いてくれます。見るからに外国人である見ず知らずの人にも親切に接してくれるドイツの人たちは、私が始めに抱いていたイメージとは全く違い、とても温かい人柄です。日常生活や旅行先でいくつかトラブルもあったのですが、担当の人に笑顔で話されてしまうと、どうしても憎めないものです。どの国にも言えることだと思いますが、やはりステレオタイプのイメージというものとは概ね実状とは違っており、実際にドイツに来て初めて、それらがすべてそのまま事実であるわけではないということがよくわかりました。まさに「百聞は一見に如かず」です。

3. 藤田 恵莉：ケルンに留学して

私は2回生の夏から3回生の秋までドイツのケルンという街に留学していました。ケルンはフランスに近いドイツの西に位置するライン川沿いの街で、ゴシック様式の大聖堂で有名です。この街で私は一年間初めて一人暮らしをし、その間に多くの人と知り合い、また、ヨーロッパのさまざまな国を旅行したりなど、得難い経験をすることができました。

その中でもこの留学中に私が特に得た大切なものは友人です。私が初めてケルンに到着したときは何もわからない中で一人の知り合いもおらず、不安でいっぱいでした。そんな時偶然にも、1回生の夏休みにゲッティンゲンの夏期講習会に参加したとき寮で知り合った、韓国の友達と大学で再会したのです。お互いに本当に驚き、嬉しくて「何でここにいるの?」と尋ね合いました。聞けば彼女も私より少し前に、留学するためにケルンにきたとのこと。「こんな嬉しい偶然があるんだなあ」、と私は感激しました。その後彼女は私にビザや保険、住所登録のことなどを詳しく教えてくれ、とても親切にしてくれました。彼女は留学中に一番仲良くなった友達の一人です。他にも（寮で?）一緒に住んでいたポーランド人の女の子や語学コースで知り合った他の外国人、日本語を勉強しているドイツ人など日本には知り合うことのできない様々な人と友達になることができました。みんなで一緒にそれぞれが自分の国のご飯を作って振る舞ったり、パーティーに行ったり、カフェでひたすら語ったり……。たとえ最初は一人でも、自分が心を開いて頑張れば仲間が増やせるんだなあ、と本当に実感した1年でした。

また、私が留学中に常に悩まされていたのが語学の問題でした。留学当初、私は本当にドイツ語が喋れなくて（例えば“Woher kommst du?”が聞き取れなかったぐらいの語学レベル）、正直「この子どうしよう……。」みたいな目で見られていました。ドイツ語を喋っても相手に理解してもらえない、自分の言いたいことを表す単語が出てこないなど、最初の時期は本当に自己嫌悪と日本でドイツ語を満身に勉強してこなかったことへの後悔の毎日でした。また、ビザなどのややこしい手続きになってくると、相手も私より理解しやすい英語で意思疎通を図ってしまうような状況でした。しかし、「ドイツ語を喋らなくちゃ上手くもな

らない!!」といつも自分を励まして、できるだけ人と関わるように心掛け、毎日図書館で深夜まで勉強して努力した結果、3ヵ月もすると少しずつ周りの人とコミュニケーションがとれるようになりました。また、周りの人も「本当に上手くなったね。」と誉めてくれるほどになりました。始めのうちは日常会話でさえこんな状況だったので、大学の講義は正直99%意味がわからなかったです。友達や先生に「今日の授業って何話してたの？」と質問ばかりしていました。後半の半年はだいぶマシにはなりましたが、本当にこんな語学レベルで1年間やってこれたのは、周りの人の優しさがあったからだと思っています。

この1年間で私は語学の勉強だけでなく、人として色々大切なことを学びました。これからもこの経験を糧にして様々なことにチャレンジしていきたいと思っています。

4. 吉田 絃子：コンスタンツの私

この1年間では人生の10年分以上の経験をした、私はそう感じています。与えられた日々を楽しみながら充実させる、そんな思いで私のドイツでの留学生活は2008年9月に始まりました。留学先は、自然に満ち溢れた町だとある人から聞いたコンスタンツ大学を選びました。コンスタンツにはボーデン湖というオーストリア、ドイツ、スイスにまたがる湖があり、この湖は有名な保養地になっています。冬は湖全体が凍りつき、その上でスケートを楽しむことができ、夏は逆に天気がよく、湖で泳ぐことができます。この湖は私の住んでいたところから徒歩10分程のところに位置していました。滞在中、夕暮れの中を湖に沿ってよく散歩をしたことが懐かしく思い出されます。

ドイツでの生活が始まったころ、楽しみたいと思う一方で、実際に現地に行ってみて言葉の壁を感じた私は、冬学期の課題を語学力の向上と決めました。語学力を上げて話し相手をよりよく理解できるようになりたい、そう思ったのです。そこで、大学では言語学の講義やゼミ、ドイツ文学の講義、語学コースと積極的に授業に参加しました。毎日大学に通い、家では授業についていくために予習と復習、プレゼンテーション

の準備に追われていました。

そうこうする間に冬学期が終わり、語学に多少自信が持てるようになってきたころ冬休みに入りました。冬休みの間は多くの国を周り、旅行ブックには載っていないような街にまで足を延ばし、その町の生活を感じながら現地の人と触れあうように努めました。

こうして夏学期を迎え、この学期には言語学と興味のある分野のゼミと語学コースを履修し、生活を楽しみながらも全ての単位を取ることを課題としました。冬学期に身に付けた語学を実際に使って些細なことでも質問することで多くの人と話すように心がけ、街のあちこちを訪ね、パーティーにも出かけて行きました。私は3人の留学生と共にホームシェアをして生活していたのですが、日々感じる文化の違いに驚きつつも、ホームパーティーなどもしながら交流を深めていきました。この1年で出会った友人にはたくさんの刺激をもらい、特に仲の良かった友人とは日常生活の話から家族の話、将来の夢の話、環境問題や言語についてなどさまざまな問題について意見を交換しあい、今でも忘れられない思い出となっています。

この1年は多くのことに挑戦した1年でもありました。コンスタンツ大学にはスポーツのプログラムがあり、留学生も参加できるようになっています。私は冬学期にはサルサとバレエ、夏にはエクササイズ、オリエンタルダンスに参加しました。また、趣味であるピアノを続けるためにある音楽学校を訪問したところ、私が通える期間が契約基準よりも短すぎるということで入れてもらえなかったのですが、諦められず再びお願いした結果、先生の個人的なレッスンを受けることができるようになりました。学校や住んでいた建物にはピアノ室もあり、鍵を借りて練習することもできました。街には小さなコンサートホールがあるので月1回の割合で専門家の音楽を鑑賞することもでき、おおいに趣味を楽しめました。

1年の留学生生活を終え、帰ってきた時にはドイツ語ドイツ文学専修の先生方や友人に温かく迎えていただきました。帰ってくる場があることに本当に幸せを感じ、ほっとしました。今は、留学中に学んだ語学力やドイツへの関心を大学での残りの勉学に活かし、私に欠けている文法や文学をさらに深く学ぶことによって、留学の成果をもっと生かせるよう

授業に取り組んでいます。

私は、夢は理想ではなく実現する未来だと考えています。この1年間の留学生活での経験があったからこそ夢に向かって志を高く抱き続ける私になれたのだと思います。